様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６２８４０５６

研究課題名（和文）概念表現と実体化表現から見た中国語文法史の展開―構文と文法範疇の相関的変遷の解明

研究課題名（英文）Historical changes in Chinese grammar form the perspective of concept expressions and entity expressions; an investigation into correlative changes of grammatical structures and grammatical categories

研究代表者
大西　克也（ONISHI, Katsuya）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：１０２７２４５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、異なる時代の中国語を専門とする4名の研究者が、現代中国語に関する理論的研究成果を踏まえ、文法範疇と構文とが相互に関係しながら形成されていくプロセスを解明することを目的とした。主として無標形式が担う概念表現と、主として有標形式が担う実体表現の対立と変容という理論的枠組みが、中国語文法の歴史的変遷の解明において有効の機能していることを検証し得たことは、これまでにない重要な成果である。

研究成果の概要（英文）：In this project, four researchers of us who specialize in Chinese grammar in different periods, cooperated with each other and aimed to elucidate processes changing correlatively between grammatical structures and categories with reference to good results of theoretical research of the modern Chinese grammar.
We proposed the theoretical framework of opposition and transformation of conceptual meanings mainly represented by unmarked forms and entity meanings mainly represented by marked forms, and were successful in verifying its effectiveness in research of historical changes of Chinese grammar. We really believe it is such an important result that no one has done before.

研究分野：中国語学

キーワード：言語学　中国語　歴史言語学　構文　文法範疇　概念表現　実体表現

１．研究開始当初の背景

(1)1990 年代以来の現代中国語文法に対する理論的研究の深まりを背景として、その成果を中国語文法の歴史的研究へ適用する模索が、今世紀に入って日本・中国・欧米を問わず胎動している。生成文法はもとより、認知文法、構文文法、結合価文法、談話文法、言語類型論等様々な角度からの分析から、現代中国標準語文法に関する知見が著しく深まった現在、それらと古代中国語や方言における相違と共通性を見極め、その形成される由来を探求しようとするのは中国語文法研究のあるべき極めて重要な一方向を示していると言える。

(2)しかしこのような最先端の文法理論と膨大な歴史的文献とを総合的に扱う研究手法には、現実には大きな困難が伴う。特に個人で取り組むには困難が大きく、歴史文法研究者が主体となる場合には理論に対する誤解や認識の不十分さが、また、現代語研究者が主体となる場合には歴史的な言語事実に対する把握の限界と不十分さが、研究の成果に疑問符をもたらす結果となり得るというのも現状である。今日的な意味での中国語文法の歴史的研究は、いまだ萌芽期にあると見て相違はない。

(3)平成 16 年度から始まった木村英樹を代表者とする科研プロジェクト「中国語の構文及び文法範疇形成の歴史的変容と汎時的普遍性－中国語歴史文法の再構築－」（基盤研究(B)16320049、平成 19 年度より基盤研究(B)19320057)、それに続く平成 23 年度開始の大西克也を代表とする同「中国語文法史の歴史的展開――構文と文法範疇の相関的変遷の解明」は、現代中国語研究の成果を還元しつつ中国語文法史の再構築を目指してこれまでにない研究体制を敷いた、画期的な試みであった。中国語史は通常上古、中古、近代、現代の 4 期に分けられるが、現代と上古では顕著な相違が存在する。各時代の文法を専門とする代表的な研究者がそれぞれの研究成果を突き合わせて検討することにより、変容の過程の解明を目指したのである。

(4)本研究課題は、上記プロジェクトの成果と総括の上に立ち、「構文」と「文法範疇」の歴史的展開が相互に及ぼす作用をより立体的に解明することを新たに目指すものである。言語は様々な構文と文法範疇とが織りなす共時的なパラダイムとして存在する。言語を突き動かすパラメータを解明するためには、構文を単独の現象として見るのではなく、それを構成する動詞や名詞項に関与する文法範疇や、構文相互間のネットワークを視野に入れた重層的な解析が不可欠である。本研究は、現代中国語文法において有効に機能している様々な文法範疇について、それらの範疇自身が歴史上どのように文法化され、どのような展開を遂げてきたのかを明らかにする。

２．研究の目的

(1)二千年を超える文献の歴史と豊富な方言を有する中国語は、歴史言語学にとって奥行きと幅をもった時空におけるデータの得られる世界的に見ても稀なコーパスである。本研究は、上古から現代に至るそれぞれの歴史時代を専門とする研究者の協同の下に、中国語の構文の形及び意味の変容を、各構文を構成する名詞項や動詞に関わる文法範疇の成立および展開との相関性から観察・分析することにより、歴史言語学一般への貢献をも視野に入れつつ、中国語文法史をより立体的に解明することを目的とするものである。

(2)本研究において新たな視点として導入されるのが、「概念」と「実体」という二つの範疇の対立である。この対立する範疇は現代中国語では有効に機能しているが、歴史的には必ずしもそうではなかった。例えば上古中国語では概念的な空間と実体的な空間を区別する文法手段は名詞には備わっていなかった。従って本研究では各種文法範疇やその表出形式である各種構文における「概念」「実体」二者の対立の形成プロセス自体の解明を目指すことになる。それはまた同時に、個々の構文と範疇との相関的発展のプロセスを、「概念」と「実体」を基軸に考察し、その視点のもとに従来個別に解明が試みられてきた各研究を統合し、より高度に一般化された文法化メカニズムの流れを描き出すことを最終目標とする。本研究は、構文と文法範疇とを別個に扱うのではなく、相互に影響しつつ各時代領域、地域領域におけるパラダイムを形成してきたとの認識のもとに、中国語文法の変化のメカニズムをより総体的に解明することを目指す点に、これまでにない独自の意義を持つものである。

３．研究の方法

(1)役割分担

本研究は 4 名の異なる時代の中国語を専門的に扱う研究者の協働によって中国語の文法史を解明するという点に特色がある。そのため、現代中国語文法、日中対象文法論を専門とする木村は、理論言語学、言語類型論、認知言語学などから得られる各種構文と文法範疇に関する理論的枠組みと、自らが手がける現代中国語文法の研究成果を提供することにより、現代中国語と古代中国語の違いを顕著に浮かび上がらせ、研究の糸口を提供する役割を果たした。大西は研究の起点となる上古中国語（先秦から秦漢）の分析を担当し、現代と上古との間に横たわる大きな溝を的確に把握することにつとめ、また代表者として年度毎における重点事象を提案選定するなど、統括的な立場から研究を推進した。松江は中古中国語（後漢から隋唐）、木津は

近代中国語（宋元明清）の資料分析を担当し、前後の時代の中国語との差異の由来を記述し解析することに力を注いだ。

(2)分析対象と作業内容

構文と文法範疇を同時に扱うには多量の例文を扱う必要があることから、伝世文献や現代中国語については大規模電子コーパスを主な分析対象としたが、歴史的資料については同時代資料としての竹簡、帛書、金石文、敦煌資料などの出土資料を合わせて使用し、また元刊雑劇、古本『老乞大』、明清官話課本などできるだけ同時代性を保ち、口語的特徴を有すると考えられる文献を特に重視した。現代語についてはインフォーマント調査も行った。各研究者の成果を持ち寄り検討するための研究会を毎年2回以上行い、議論の客観性と精密化を確保するため、外部の研究者も招いた。各研究者は国内外のシンポジウムに精力的に参加し、成果の発信と学術交流の深化を図った。

４．研究成果

本研究は、中国語の各種構文と文法範疇の相関的な形成のプロセスを、主として無標形式が担う概念表現と、主として有標形式が担う実体表現の対立と変容の歴史と捉え、このような理論的枠組みの有効性を個別の文法事象の通時的考察を通じて検証した。疑問詞の意味機能を指示の観点から論じることの言語学的意義を明らかにしたことと合わせ、従来の常識を覆す成果であり、歴史言語学の方法論に対しても大きく貢献したといえる。以下に主要な成果の概要を示す。

(1)現代中国語におけるレファレンス範疇を再検討することにより、中国語における様々な文法範疇において縦断的に機能している高位の文法範疇を設定し得る知見が得られた。即ち、現代中国語のレファレンス範疇における形式上の有標（不定）と無標（総称等）との対立は、意味的には実体と概念の対立に対応していると捉えなおすことが可能であり、このような組織的な対立が、範疇的属性を表す性質形容詞（無標）とアクチュアルな実体を表す状態形容詞（有標）との対立、個別具体的な行為を表わしえない無標の動詞と実空間における実体的な行為に言及する動詞の重ね型との対立など、個々の文法範疇を超えた汎範疇的な対立であることを多方面にわたって検証し得た。〈(無標：概念）／（有標：実体)〉という対立が、中国語を支配する原理的レベルでの文法範疇として設定し得るという考え方は、中国において伝統的に認められる「虚」と「実」という二項対立と相似形を為すものであり、文法史を記述する際の理論的な支柱となる可能性が認められる。本成果は『中国語学』261号（日本中国語学会、2014年）に代表者及び分担者が執筆した特集論文（論文㉓～㉖）にまとめられ、4年間のプロジェクトの出発点となった。

(2)〈(無標：概念）／（有標：実体)〉という枠組みの有効性を検証するに当たり、主要な対象として選定したのが疑問詞の意味機能の歴史的変遷である。名詞や代名詞のようにそれ自体が指示（refer）する対象（referent）というものが存在しない疑問詞は、従来、指示（reference）の議論の外に措かれてきた。しかし発問が解を求める行為である以上、解として予測される対象の指示特性（referentiality）が、なんらかのかたちで疑問詞の選択や用法に反映されるという可能性は十分にあり得ると考えられる。このような想定のもとに研究を進め、以下の知見が得られた。

①従来の疑問詞研究は、現代・古代を問わず、〈人〉を問う、〈事物〉を問う、選択を求めるという枠組みから論じられるのが通例であった。これに対し、現代中国語における３種の疑問詞――“谁”（だれ)、“什么”（なに)、“哪”（どれ）――を取り上げ、それぞれの指示特性に着目しつつ意味機能を特徴づけた結果、“谁”と“什么”がそれぞれ知識領域にストックされている〈個人〉と〈範疇〉の探索を要求する形式として機能し、“哪”がコンテクスト領域に所在する実体的または言語的存在の探索を要求する形式として機能しているという事実、すなわち当該の疑問詞が、未知の存在の認知的な探索行為に関わって三者三様の意味機能を対立的に担っているという事実が明らかになった。解の指示性に関する〈個人〉／〈範疇〉の対立、解の探索先に関する〈コンテクスト領域〉／〈知識領域〉の対立は、まさに〈実体〉／〈概念〉という上位レベルでの対立の反映であり、本課題が検証対象とする枠組みの有効性をここでも示し得た。

②上記の現代語における成果を歴史的に検証した結果、属性記述、対象指定を問わず、知識領域における範疇（概念）と個（実体）との対立が通史的に認められるのに対し、解の探索先についての知識領域（概念）とコンテクスト領域（実体）の対立形成と成熟は、近世以降のことであったことが明らかになった。このことは、〈概念〉／〈実体〉の対立が、言語の歴史の様々な局面において他の文法範疇に影響を及ぼし、変容をもたらすより上位の範疇であったことを示していると考えられる。

③解の探索先としてのコンテクスト領域の確立は、「若」「哪」等n-系疑問詞の成立と成熟によってもたらされた。現代中国語でリスト指示要求機能を担う“哪”の起源は、〈起点／着点〉を問う中古の「若」「那」に遡ることができ、中古後期に〈方向〉という〈起点／着点〉よりも一層限定的かつ均質的な候

補を解に求める用法を生じたことが、n-系疑問詞がリスト指示用法を獲得する道を拓いた。しかし中古期における「阿那箇」や「若箇」等、リスト指示用法には「箇」が必須であった。出自において個別の〈物〉との関係性が希薄であった「若」「那」が、コンテクストまたは談話の場に存在する対象を指示するためには、個体化機能を本質とする「箇」の付加が欠かせなかった。ここでも〈実体〉／〈概念〉の対立が作用しているさまを具体的に観察することができる。

④これに引き換え、知識領域における個と範疇との対立は、上古以来比較的安定していた。“誰”の上古における〈名札〉目当てから中古以降の〈個人〉目当てへの拡張や、文語的と思しい“何人”の近世における個別指定への拡張など、部分的な変化は観察されるものの、“誰”の安定性の背景には、時代差を越えた人間の知識体系の human centric な特質の反映として、個の単位で知識領域にストックされている〈人〉の特性があると考えられる。以上の成果は最終的には本プロジェクト構成員 4 名による共著論文（論文⑦）として発表された。

(3)〈概念表現〉と〈実体表現〉の対立は、対象を類として捉えるか、特定の時空間に位置付ける具体的個別の存在として捉えるかという、人間のいわば原初的な世界認識の在り方と深く結びついている。中国語において、この対立が汎時代的に高位の文法範疇として機能し、様々な文法事象の変容に結びついていることを明らかにした本研究成果は、本課題が取り上げられなかった他の文法現象の分析にも適用が可能である。共時的、通時的を問わず、今後より多くの中国語の文法事象がこの枠組みから解明されることにより、歴史言語学理論一般への貢献が期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 28 件）
①大西克也、「非発掘簡」を扱うために、中國出土資料の多角的研究、査読無、2018 年、3-33 頁
②Kimura, Hideki、‘Who’, ‘what’, and ‘which’ in Japanese and Chinese、*Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*、査読有、2018 年、533-555
③木津祐子、京都大学文学研究科蔵『説文古本攷』田吳炤校本について、稲畑耕一郎教授退休記念論集　中国古籍文化研究、上、査読無し，2018 年、281-289 頁
④飯田真紀、粵語句末助詞 gE2 的語義和語義變化、中國語文通訊、査読有、第 97 巻 第 1 期 2018 年、19-31 頁
⑤飯田真紀、広東語の文末助詞連鎖の形態論的分析、ことばとそのひろがり(6) ―島津幸子教授追悼論集―』、査読無、2018 年、31-58 頁
⑥Iida, Maki、Sentence-final particles in Cantonese and Japanese from a cross-linguistic perspective、*Media and Communication Studies* (Hokkaido University) 、査読有、71、2018 年、65-93 頁
⑦木村英樹、大西克也、松江崇、木津祐子、中国語史における疑問詞の指示特性－〈人〉を解とする疑問詞を中心に、楊凱栄教授還暦記念論文集　中日言語研究論叢、査読無、2017 年、7-53 頁
⑧大西克也、釋「喪」「亡」、第二十八屆中國文字學國際學術研討會論文集、査読有、2017 年、377-403 頁
⑨木村英樹、感情と感覚の構文論――　“痛快”と“凉快”の境界――、中国語学論文集、査読無、2017、153-176 頁
⑩木津祐子、東亞官話圈的“訓讀”――以江戸時代的“崎陽之學”和長崎唐通事為例、周縁アプローチによる東西言語文化接触の研究とアーカイヴスの構築、査読無、創刊号、2017 年、171-188 頁
⑪松江崇、淺談不符合“聲調排列原則”的同義並列雙音詞的產生機制、開篇、査読有、VOL.35, 2017 年、63-70 頁
⑫楊凱栄、从标记有无看汉日对信息来源的处理―以感情、感觉及状态变化的表达为例、杉村博文教授退休紀念中国語学論文集、査読無、2017 年、326-349 頁
⑬飯田真紀、粵语句末助词 "嘅 "ge2 的语义和语法化途径、中国语文、査読有、第 4 期(总第 379 期)、2017 年、421-437 頁
⑭張佩茹、現代中国語文法研究と中国語教育、改訂新版 中国学入門―中国古典を学ぶための 13 章、査読無、巻 1、2017 年、119-134
⑮木津祐子、「崎陽の學」と荻生徂徠――異言語理解の方法を巡って、日本中國學會報、査読有、68 号, 2016 年、136-151 頁
⑯楊凱栄、论上海话的使役、被动标记、华东师范大学学报哲学社会科学版、査読有、48 期、2016 年、96-103 頁
⑰楊凱栄、句中成分的焦点化动因及优先度等级　――从事件句到说明句、中国語学、査読有、263 号、2016 年、20-43 頁
⑱木村英樹、中国語疑問詞の指示特性――“什么”(なに)“谁”(だれ)“哪”(どれ)の機能対立――、日中言語研究と日本語教育、査読有、8、2015 年、12-23 頁
⑲木津祐子、琉球通事的正統與長崎通事的忠誠―從两地「通事書」的差別談起、翻譯與跨文化流動：知識建構、文本與文體的傳播、査読無、2015 年、339-369 頁
⑳松江崇、談《旧雑譬喩経》在佛教漢語発展史上的定位、中文学術前沿、査読無、8、2015 年、44-53 頁
㉑松江崇、漢語語彙史における単音節語と複音節語の「共存／競争」現象について、火輪、

査読無、36、2015 年、2-14 頁
㉒飯田真紀、粤语句末助词 "嘅 ge2"的两种功能和交互主观化现象、第十八届国际粤方言研讨会论文集、査読有、2015 年、113-12 頁
㉓大西克也、中国語における指示性範疇化の胎動、中国語学、査読有、261 号、2014 年、5-25 頁
㉔木村英樹、“指称”の機能――概念、実体および有標化の観点から、中国語学、査読有、261 号、2014 年、64-83 頁
㉕木村英樹、こと・こころ・ことば――現実をことばにする「視点」、人文知 1――心と言葉の迷宮、査読無、2014 年、97-118 頁
㉖木津祐子、不定指称としての“一箇”成立前史―『朱子語類』の場合―、中国語学、査読有、261 号、2014 年、44-63 頁
㉗松江崇、唐五代における不定名詞目的語の数量表現による有標化－敦煌変文を主資料として－、中国語学、査読有、261 号、2014 年、26-45 頁
㉘大西克也、上古漢語“奪取”類双及物結構研究、語言学論叢、査読有、第 49 輯、2014 年 41-65 頁

〔学会発表〕(計 44 件)
①張佩茹、台湾国語における軽動詞“做”の用法について、第 38 回中国語文法研究会、2018 年
②大西克也、説“雨”和“雪”――氣象詞語在古漢語中的語法表現、北京大學第一届古典學國際學術研討會―中國古代語言、文學和文獻研究的古典學視野、2017 年
③大西克也、説“見”――清濁別義的另一個解釋、漢語史研究國際研討會(2017)、2017 年
④木村英樹、指示詞・疑問詞・代名詞の意味と用法、中国語教育学会 2017 年度第 2 回研究会、2017 年
⑤木村英樹、“笑道”のポライトネス、日本中国語学会 2017 年度第 2 回関西支部例会、2017 年
⑥木津祐子、『三折肱』について、「資料から見る東西の言語接触」研究例会、2017 年
⑦松江崇、也談上古漢語否定句中的代詞賓語前置現象、揚州大学文学院講座 2017 年
⑧松江崇、漢語文法史の諸問題、第 253 回中国語中国文学談話会、2017 年
⑨松江崇、從中古文獻看抉擇義疑問代詞“哪”的－兼談疑問代詞的功能擴展機制―、第 11 届漢文仏典語言学国際学術研討会、2017 年
⑩楊凱栄、从示证性看汉语对信息来源的处理」 第六届海外中国语言学者论坛、2017 年
⑪Iida, Maki、A morphological analysis of the combinations of the sentence-final particles in contemporary Cantonese、The 22nd International Conference of Yue Dialects、2017 年
⑫飯田真紀、跨語言視角下粤語句末助詞的定位問題～與日語句末助詞的比較～、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院主催国際シンポジウム「多層言語環境時代の外国語教育」、2017 年
⑬飯田真紀、粤語句末助詞“ge2”的両種用法和交互主観化現象、第 17 期 中山大学語言学沙龍、2017 年
⑭飯田真紀、跨語言視角下粤語句末助詞的定位問題 ～ 與日語句末助詞的比較、第 18 期 中山大学語言学沙龍、2017 年
⑮大西克也、上古中国語における疑問詞の指示特性、日本中国語学会第 66 回全国大会、2016 年
⑯大西克也、論上古漢語代詞“之”和“其”的替代功能、第九届國際古漢語語法研討會、2016 年
⑰木村英樹、疑問詞選択の指示的要因、日本中国語学会第 66 回全国大会、2016 年
⑱木津祐子、近世中国語における疑問詞の指示特性、日本中国語学会第 66 回全国大会、2016 年
⑲松江崇、中古中国語における疑問詞の指示特性、第 66 回日本中国語学会全国大会、2016 年
⑳松江崇、略談 VC 型使成式的擴展機制－以佛教語言語料中“V+在/到”型使成式為例―、第十届漢文佛典語言学国際学術研討会、2016 年
㉑松江崇、中古漢語的疑問數詞系統――兼論“多少”的發展過程――、紀念蔣礼鴻先生誕辰 100 周年暨第九届中古漢語国際学術研討会、2016 年
㉒張佩茹、コミュニケーションの基盤をなす言語の身体性―漢字文化圏を中心に―、二松學舍大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業報告会、2016 年
㉓飯田真紀、広東語と日本語の終助詞について、公開シンポジウム「日本人から見る多層言語社会香港、2016 年
㉔飯田真紀、広東語の文末助詞 aa1maa3 の意味変化、日本言語学会第 153 回大会、2016 年
㉕飯田真紀、終助詞(文末助詞)の機能と特徴～ 広東語・北京語・日本語の場合～、国際シンポジウム「東アジアの言語コミュニケーションを考える ―多層言語社会香港からの示唆」、2016 年
㉖大西克也、試論秦簡〈官箴〉的語言文字特點、出土文獻與先秦經史國際學術研討會、2015 年
㉗大西克也、清華簡《繫年》為楚簡説―從其用字特點探討―、“源遠流長：漢字國際學術研討會暨 AEARU 第三屆漢字文化研討會”、2015 年
㉘木村英樹、感情と感覚の構文論、二松学舍大学中国語学講演会、2015 年
㉙木津祐子、非漢語圏における中国白話文(Chinese Vernacular Writing in Non-Chinese-Speaking Regions)、第 60 回国際東方学者会議関西部会、2015 年
㉚木津祐子、18 世紀域外的「叙事」―以唐通事和荻生徂徠為例、中央研究院中国文哲研究所・東京大学東洋文化研究所合同国際シンポ

ジウム「世界の中の中国明末清初」、2015 年
㉛木津祐子、クレオール文学の担い手としての唐通事（1）―長崎諸寺をどう語るか―、台湾大学文学院日本研究中心・中央研究院合同国際学術研討会「黄檗宗と十七世紀の東亜文化交流」、2015 年
㉜松江崇、談唐五代的兩類量詞及其語義功能的差異、首届文獻語言學國際學術論壇、2015 年
㉝松江崇、談唐五代的兩類量詞及其語義功能的差異、中国人民大学講演会、2015 年
㉞楊凱栄、汉语事件句的焦点化动因、 日本中国語学会第 65 回全国大会、2015 年
㉟楊凱栄、从示证性看汉日对事态的不同表达方式、桜美林大学「当代漢語語法研究前沿」講演会、2015 年
㊱楊凱栄、汉语句子成分的焦点化、第五届海外中国语言学者论坛、2015 年
㊲楊凱栄、周遍性句式不同的认知模式及表达功能、华东师范大学对外汉语学院講演会、2015 年
㊳楊凱栄、汉日语言差异与对比研究、中国外交学院講演会、2015 年
㊴飯田真紀、広東語の文末助詞“gE2”の意味変化、日本中国語学会北海道支部例会、2015 年
㊵飯田真紀、粵語句末助詞 gE2 的語義和語義變化、第二十屆國際粵方言研討會、2015 年
㊶飯田真紀、粵語裏「V 到 NP」的構式意義以及「到」字的功能擴張特徵、香港科技大学人文学部 Seminar、2015 年
㊷飯田真紀、粵語裏“V 到 NP”的構式意義以及“到”字的功能擴張特徵、香港中文大學中國文化研究所 吳多泰中國語文研究中心語言學講座、2015 年
㊸大西克也、「雅言」獻疑、第十屆通俗文學與雅正文學 語言與文字 國際學術研討會、2014 年
㊹松江崇、淺談不符合“聲調原則”的同義並列雙音詞的產生機制、第三屆漢語歷史詞彙與詞義演變學術研討會、2014 年

〔図書〕（計 4 件）
①田中和子、池田巧、木津祐子他、京都大学学術出版会、探検家ヘディンと京都大学、2018 年、278 頁（237-248 頁、266-270 頁）
②木村英樹、筑摩書房、中国語はじめの一歩〔新版〕、2017 年、324 頁
③内田慶一、木津祐子、関西大学出版部、関西大学長澤文庫蔵琉球官話課本集、2015 年、360 頁
④大西克也、大櫛敦弘、東方書店、馬王堆出土文献訳注叢書　戦国縦横家書、2015 年 266 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大西　克也（ONISHI, Katsuya）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：10272452

(2)研究分担者
木村　英樹（KIMURA, Hideki）
追手門学院大学・国際教養学部・教授
研究者番号：20153207

木津　祐子（KIDZU, Yuko）
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90242990

松江　崇（MATSUE, Takashi）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・准教授
研究者番号：90344530

(3)連携研究者
楊　凱栄（YANG, Kairong）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：00248543

飯田　真紀（IIDA, Maki）
北海道大学・大学院国際広報メディア・観光学院・准教授
研究者番号：50401427

張　佩茹（CHANG, Peiju）
二松學舍大学・文学部・講師
研究者番号：00748931